

学会ハイライト

第115回日本皮膚科学会総会を終えて

(平成28年6月3日(金)～5日(日)・国立京都国際会館にて)

中川 秀己

東京慈恵会医科大学皮膚科学講座主任教授

はじめに

平成28年6月3日から3日間、京都の国立京都国際会館において第115回日本皮膚科学会総会を主催させていただきました。会期中は全国から6,000名を超える参加者にお集まりいただき、無事盛會裡に総会を終了することができました。東京慈恵会医科大学皮膚科学講座が総会を担当させていただくのは1969年第68回第5代土肥淳一郎教授、1999年第98回第7代新村真人教授に次いで第8代教授の私で3回目になります。本年はちょうど、東京慈恵会医科大学皮膚科学講座が1896年(明治29年)に笹川三男三先生を初代皮膚科教授として開設されてから120周年に当たっており、教室員一同、精一杯頑張ったつもりです。参加いただいた皆様に教室を代表して深謝いたします。学会運営を円滑に進めていただいた日本皮膚科学会の総会担当の山田さん、山本さん、石地事務局長、朝比奈プログラム委員長、梅澤実行委員長、石氏医局長をはじめ、東京慈恵会医科大学皮膚科学教室員と同窓会(慈身会：会長 澤田俊一先生)に厚く御礼を申し上げます。

本総会のテーマ

学会のテーマは「Never Ending Dermatology－発展し続ける皮膚科学－」としました(図1)。種々の皮膚疾患の病態の解明が進むとともに、この数年、分子標的薬を含む多数の新薬が皮膚疾患の治

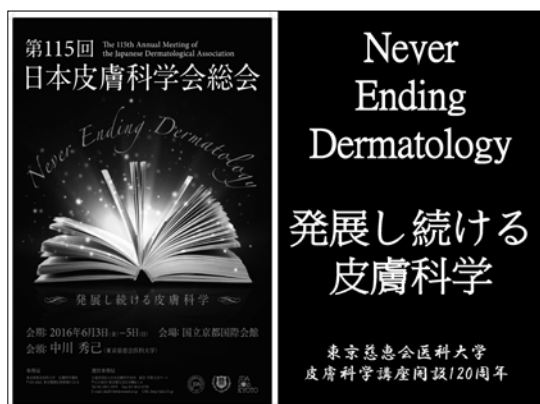


図1 第115回日本皮膚科学会総会のテーマ。

療に応用されるとともに、さらに新薬の開発が矢継ぎ早に進められています。国内に目を向けると医療保険環境の急激な変化、超高齢化社会が進むとともに、地域医療の充実が叫ばれています。また、先行き不透明な新専門医制度の発足、卒業時アウトカムをベースとした国際医学教育基準に適合する医学カリキュラムの改革などを考えるとそれらに対応して皮膚科学も発展し続けなければいけません。このテーマと会頭講演のサブタイトル「地霊人傑：ちれいじんけつ」と合わせて学会内容に反映できるよう最大限の努力をしたつもりです。なお、「地霊人傑」は東京慈恵会医科大学の学祖の高木兼寛先生の座右の銘の一つであります。

「医療環境の急激な変化、グローバル化に迅速に対応するために皮膚科学はたゆまなく発展し続



図2 土肥記念国際交換講座で講演されるBarker教授(King's College London).



図3 特別企画で講演されるノーベル医学生理学賞受賞の大村智先生(北里大学名誉教授).

けなければいけません」

「〈地霊〉から、沢山のことを学び、活用し、それを伝統の叡智として次の世代に伝えていくためには、われわれ自身が真摯な気持ちで皮膚科に取り組む地霊となり、人傑を育成することが大切ではないかと思います。明日を生きる知恵は歴史のなかにあると考えています」(会頭挨拶より)。

招待講演と特別企画など

土肥記念国際交換講座(56回目)の演者には英国のKing's College London皮膚科教授のBarker先生に「OPTIMISING OUTCOMES IN PSORIASIS」のタイトルで乾癬の病態と新しい治療の展望と将来の夢をお話していただきました(図2)。St. Thomas病院医学校は本学学祖高木兼寛先生が学んだ医学校であり、長年医学生との交換留学を行っている長い連携のある医学校です。またBarker先生は私のライフワークである乾癬の分野を通して長い親交のある先生です。

特別企画は疥癬の治療薬イベルメクチンを発見された皮膚科にもなじみの深い先生でノーベル賞を受賞された大村智先生(図3)による「微生物から人類への贈物—エバールメクチン物語—」が大変好評でほぼ満席の状態でした。「再生医学」、「より強い皮膚科を目指すキャリアパス」、教室が精力

的に関わってきた「神経線維腫症I型」、「痛みとかゆみを解き明かす」、臨済宗相国寺派管管長の有馬頼底様による「別に工夫なし」、「目からウロコの基礎医学」、「高齢化時代の地域医療を考える」、新専門医制度では必修となる「知っておくべき医療安全・感染症対策・COI」を取り上げました。おかげさまでどの企画も好評でした。

なお、今回の皆見省吾記念賞は慶應義塾大学の足立剛也先生、日本皮膚科学会雑誌論文賞は昭和大学の今泉牧子先生、The Journal of Dermatology Best Paper Prizeは今村病院分院の米倉健太郎先生が受賞されました。

教育講演、一般演題など

教育講演は51セッションで、オーガナイザーの先生方に、(1)ジュニアコース、(2)シニアコースと難易度をつけてもらいましたが、選択するのに役立って良かったとのことのお褒めのお言葉を多数いただきました。

一般演題は、これまでの総会では原則としてポスターの展示となっていたましたが、これを大幅に見直し、海外の学会にならって電子化することにしました(e-Poster)。また、支部総会や地方会のように口頭での発表の機会を増やすことにしました。一般演題(451題)のうち158演題を座長の先生、プ



図4 懇親会で熱唱される島田理事長.

ロプログラム委員の先生に選定していただき、優れたものを口頭発表にしましたが、これも好評で、次回からの総会でも継続される予定になっています。医学生・研修医発表セッション(Future Dermatological Session)には全国53大学から医学生・研修医92名が参加し、教育講演とともに各施設から演題が発表され活発な討議が行われました。来年度から各教室の入局者が増えるきっかけになることを期待しています。新しい試みとして主にアジアの若手の皮膚科医を中心としたEnglish Speaking Sessionも企画しました。これは来年からも継続される予定になっています。スポンサーセミナーは計63企画されましたが、どのセミナーも参加者であふれており、ホッとしている次第です。

最終日には恒例のスペシャリティーナースセミナー(300名以上の参加)を行いました。年々皮膚科診療に情熱を燃やす看護師さんが増えてきて

いるようで頼もしく思いました。午後の市民公開講座「進歩する乾癬・悪性黒色腫の診療」では近年、治療の進歩が著しい両疾患を取り上げ、姉妹校である京都府立医科大学と共催で最新の情報を提供していただきました。加藤則人先生、延山嘉真先生の名司会のもと、市民だけでなく皮膚科医にもわかりやすい公開講座でした。

最後に

今回は「良く学びよく遊ぶ」をモットーとした総会にしたいと考え、意見交換会は京都市水族館で行い、会員懇親会はたくさんの方が参加できるように国立京都国際会館を使用し、公益法人の許容範囲内ですが、お酒、料理を含め工夫を凝らしました。島田理事長が「愛の賛歌」を熱唱され(図4)盛り上がるとともに多数の方が参加され和気あいあいと懇談してくれて、主催したわれわれも一安心でした。